

ここふる学校 かい「こ」育て 解説編 ①

こちらでは、大野城市の^{ようさん}養蚕の歴史やカイコの体など、ちょっと難しめの内容をお話します。

1. カイコを育てよう！

今から70年ほど前まで、今の^{ちくしぐん}大野城市を含む旧筑紫郡では養蚕が盛んに行われていました。市内にはたくさんの桑畑があり、多い時で農家の半分程が養蚕を行っていました。現在ではもう養蚕は行われていませんが、大野城市には市民の方々から^{きそつ}寄贈いただいた養蚕関係の民具が多数あります。

以前、市役所内にあった歴史資料展示室でカイコが^{そだ}育てられていたことがありましたが、それももう10年以上前。今回の『かい「こ」育て』で、カイコと大野城市の養蚕の歴史に興味をもっただければ幸いです。



カイコの繭

2. 養蚕^{ようさん}ってなに？

養蚕とは、絹糸^{きぬ}を作るためカイコを育てて繭^{まゆ}をとることで、とった繭から糸を引き出し、何本かより合わせたものが生糸^{きいと}、それを織って布にしたのが絹織物^{きぬおりもの}です。

カイコは蛾^がの仲間で、桑^{くわ}の葉を食べて育ちます。養蚕は約5000年ほど前に中国で始まったとされ、東アジアに生息する野生の「桑蚕^{くわこ}」という虫を改良し、飼^かいやすく良質な繭^{まゆ}を作るようにしました。家蚕^{かさん}といい、ウシやブタなどと同じように人間が家畜化^{かちく}した昆虫^{こんちゆう}です。

日本でも古くから養蚕が行われており、特に九州北部では、弥生^{ひみこ}時代の早いうちから養蚕が行われていました。卑弥呼^{ひみこ}の記述で有名な『魏志』倭人伝^{わじんてん}には、倭国で桑を植えてカイコを飼^かい、糸つむぎをしていたことなどが記されています。奈良時代には、税として絹織物^{きぬおりもの}や真綿^{まわた}（繭^{まゆ}をのばして綿にしたもの）が各地から都に集められ、『古事記』や『日本書紀』^{にほんしょき}といった書物にもカイコの記述があります。

カイコの幼虫^{えさ}は餌^{えさ}がなくなっても逃げることはなく、成虫は飛ぶこともできません。カイコは人間が世話をしないと生きられないのです。きれいな糸と収入をもたらすカイコは、「おかいこさま」や「おしらさま」とよばれ、1頭、2頭と数えられて大切に世話をされました。カイコを表す呼び名やカイコに関連する言葉は日本各地に多数あり、それだけ日本人にとって身近で重要な生き物だったのだとわかります。



カイコの成虫



桑の葉を食べるカイコ